

“うごきの比較学”から見た国境地域

——惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求 (2)——

新 原 道 信

Borderland Seen from “Comparatology of Nascent Moments”: Sociological Explorations on the “Living knowledge (*cumscientia ex klinikós*)” for the Planetary Society (2)

NIHARA Michinobu

This article evolved from a research project called “Sociological Explorations on the “Living knowledge (*cumscientia ex klinikós*)” for the Planetary Society” which is a part of the European Research Network’s activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea that exploring, against the tide of the disposition to dissociate/disengage oneself from what is happening, “Region and Community for Sustainable Ways of Being” is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, we have sought to clarify the ways in which “Living knowledge (*cumscientia ex klinikós*)” is lived or embodied in the borderland (“frontier/liminal territories”) in which the varieties of “*homines patientes*” try to coexist while conflicting, merging, and intertwining with one another. Under such objectives, I conducted research in certain areas, regarding the autonomy and independence of such localities, the global inter-cooperation among the communities, and the composite/complex/hybrid identities of the “*homines patientes*”, while employing such key concepts as “imagination and creativity of limit-situation.” The article reflects on the epistemology developed from dialogue with Alberto Melucci, Alberto Merler, Andrea Vargiu, Anna Fabbrini-Melucci. My research experience of encountering the “wise on the frontier/liminal territories” and being involved in the “crude reality” submits a theoretical framework for conceiving and coping with the ongoing problems. In that, the article sets out a preliminary exploration for what might be called “Comparatology” which is being involved with the field, being there by accident at the nascent moments in which critical events take place, and comparing contra-puntally and poly/dis-phonically.

キーワード：うごきの比較学，国境地域，境界領域，臨場・臨床の智，惑星社会のフィールドワーク，メルッチ，メルレル

まずデータの観察と蒐集から始めて，さまざまなデータを分類し，各々のカテゴリーの属性の共通点と相違点をしらべる．そしてことなる属性をもつことになるカテゴリーの事物の関係をしらべ，抽象度の低い「実体的」理論から，しだいに抽象度の高い「形式的理論」へと，累積的に調査研究をすすめる．そこでは仮説の検証が目的ではなく，ことなるカテゴリーとその属性のあいだの新しい関係を発見していくことが目的である．したがって，事物の関係の発見のために用いられる仮説または仮説の体系は，単一ではなく，発見に役立つかぎりにおいて，複雑であり，多様であってよい．

比較をするためには，まず異なるカテゴリーに対象を分類する必要がある．分類された個体または集団を，きり離して，別々のものとしてその固定され区分けされた属性を比較するだけでは不十分なのである．……異なる種類に分類されたものどうしのあいだに，相互作用があることに注目し，その相互作用をとおして，それぞれ固有と思われた属性が変化することがあることを念頭においている¹⁾．

1 はじめに

本稿は，中央大学社会科学研究所のヨーロッパ研究ネットワークを母体として着手された共同研究チームである「3.11以降の惑星社会」（2013～2015年度）と「惑星社会と臨場・臨床の智」（2016～2018年度）の研究活動に基づいている．本研究チームの〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ〉として構築の途上にある“うごきの比較学（“Comparatology” of nascent moment）”は，これまでのイタリアの共同研究者との間の“対話的なエラボレイション（co-elaboration, coelaborazione, elaborazione dialogante）”によって創りあげられてきたものである．

(1)本調査研究チームは，イタリアの社会学者 A. メルッチ（Alberto Melucci）の“惑星社会（planetary society）”論と A. メルレルの“社会文化的な島々（isole socio-culturali）”の理論を現代社会認識の基点としている．

(2)本稿は，“3.11以降の惑星社会の諸問題に応答する”ことを目的として，“複数の目で見ても複数の声を聴き，複数のやり方で書いていく”かたちで進めてきた一連の論考の流れのなかに位置づけられるものである．本稿においては，この試みとして集団・集合的，協働的になされてきた“うごきの比較学”の観点から，これまで実施してきたフィールドワークを意味づけ，今後の方向性を確認する．

(3)そのために，“うごきの比較学”という設定が持つ意味（2節），惑星社会の「問題解決」

におけるジレンマ（3節）、惑星社会におけるフィールドワークの意味づけ（4節）、国境地域の再定義（5節）、“社会文化的な島々”から見た“基地の比較学”（6節）について述べる。

2 “うごきの比較学”という設定とその意味

“うごきの比較学”は、「可視的局面」の背後で諸個人の深部で不断に醸成されている「潜在的的局面」に着目し、その“うごき（nascent moments）”と、社会そのものの変動（transformation/transcendence/changing form/metamorphose）との関係性の動態を理解することを目的としている²⁾。なぜ個々人の内なる“うごき”，そして比較なのか。その理由は、以下のような現代社会認識に基づいている。

すでに1980年代に、稲上毅が指摘していたように、「人間自然をふくめた自然を、作為の対象、事実上のものとみなし」、「オープンエンドの移転（移動）と可逆性（可変性）への信条」（進化主義）は、修正と補足を余儀なくされている。これまで「社会発展の弱い外生変数とみなされてきたものが、いま改めて重要な内生変数として強く意識されはじめ」ており、現代社会は、少なくとも4つの視点（①地球社会化の進展、②非移転-不可逆性 [=性、年齢、人種etc.]の比重増大、③人口爆発と高齢化、④自然-生態系と「限界の原理」への視点）についての配慮を欠くことは出来ない³⁾。

メルッチもまた、1980年代より、システム化・ネットワーク化にともなう情報や資本の「移動（transference）」の全方位的な展開と浸透の一方で、惑星そのものという単位での自然生態系や資源の有限性、さらには極度にシステム化した社会の統治性の限界、とりわけ心身/身心の問題の内なる変動の重要性について指摘していた⁴⁾。すなわち、モノ（物）-イキモノ（生命）-ココロ（心身/身心）-コトバ（意識・概念）の間[境界領域]にあるコトガラである惑星社会の問題は、個々人の“社会的痛苦（patientiae, sufferentiae, doloris ex societas）”の問題として立ち現れる⁵⁾。不満、不安、苦悩、アルコール依存、薬物依存、病、狂気、自殺など、“痛み”は澱みとなって個々人の身心に滞留し、ある日突然、社会的な出来事として噴出する。

それゆえ、メルッチは、日常生活と社会システムの間位置する社会運動の背後にあって、根本的な変化が始まる場所であるところの、諸個人の深部から発せられている「聴かれるべき声」、たとえそれが（「ヒアリング」や「インタビュー」では）「聞こえない」ものだとしても、「聴く」ための方法を創出することが、今日の社会学の重要な課題であるとした⁶⁾。

惑星そのものの変動に影響を与える存在となった「人間社会（人間圏）」の問題を考えると、人文社会科学は、物質圏（=大気圏・水圏・地圏）と生物圏（生態系、生命系）との関係性の問題を組み込まざるを得ない段階に来ている⁷⁾。「3.11以降」の日本社会においては、“惑星社会”の“複合・重合”性もたらす諸問題（環境・エネルギー政策、被災者支援、地域復興、とりわけ汚染水に象徴される処理困難な問題）が顕在化した。そのなかで、確率論的・数量的な「想

定」に基づく「問題解決」という在り方の「限界」が指摘され、ヒト・モノ・イキモノの関係性再構築に基づく新たな社会構想が求められている⁸⁾。

メルッチによれば、相互依存的で相互作用的な惑星社会においては、異質を含み込んだ「諸関係の微細な網の目」が“多重／多層／多面”化することによって、マージナルなものが社会の根本的な資源と成り得る⁹⁾。着目すべきは、「想定外の状況」に直面した個々人のなかに、生存の在り方 (ways of being) にまで及ぶ価値観の見直しが萌芽している点である。

ここで求められるのは、個々人の深部における微細でリフレクシヴ (再帰的／内省的／照射的) な“うごき”に着目し、その“うごき”の方向性に応ずるかたちでの社会構想——問題のなかに予め答えが含まれているような「問題解決」ではなく既存の領域を横断して新たな問いを立てる「学」の創出である。すなわち、社会分析の通常のパラダイムである社会的資源と機会の分配構造、欲求・価値志向の充足と環境適応力の維持、配分ルールの整備等の、いわば「外部」あるいは「周辺」、さらには“端／果て (punta extrema/finis mundi, terra of the end of world)”に置いてきた「視点」を内面化した「学」である。「視点」の内面化のためには、「個(体)的」で内面の奥深くに生起している社会文化的プロセスを比較しひとつひとつ意味付け定義し直すための方法 (エピステモロジー／メソドロロジー) が必要となる。

“比較学 (Comparatology)”は、comparative study でも、comparative method (ology) でもなく、個々の科学の境界を横断し、異なる境界線の引き方、新たな比較 (対話) 可能性を提示する。既知の分類による属性の比較にとどまらず、別ものとされたもの同士の“未発の状態 (nascent state)”¹⁰⁾に着目し、関係性のうごき (nascent moments of relationship), すなわち〈関係性の (在り方そのものが変化していく社会文化的) プロセスを比較 (対話) のなかで感知する智 (cumscientia for perceiving the dynamism, puls, rhythms, roots and routes of relationship)〉である¹¹⁾。

“うごきの比較学”は、コミュニティ・スタディーズ／“地域学 (Terranology, terranologia)”／“比較学 (Comparatology)”という“多重／多層／多面”性を持つ。個別性・固有性を持った場所における“地域社会 (region and community)”のコミュニティ・スタディーズを基本としながら、特定のコミュニティの背後にある“地域社会／地域／地 (region and community/field/terra)”の全景把握の試みとしての“地域学 (Terranology, terranologia)”を内包している。惑星社会のもとでの“移行、移動、横断、航海、推移、変転、変化、移ろいの道行き・道程 (passaggio)”に在る“うごきの場に居合わせ”，その場の組成が持つ“衝突・混交・混成・重合”，「錯綜」の動態を，比較のなかで把握することを試みるのが，“うごきの比較学 (“Comparatology” of nascent moments)”ということになる。

3 “惑星社会”のジレンマ

現代社会が抱える“惑星社会の諸問題”に対峙しようとするときの「ジレンマ」について、メルッチは、以下のように述べている。メルッチの著『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』の第9章は「地球に住む」というタイトルとなっており、その冒頭の節は、「答えなき問い」と題されている。メルッチは、ここで、（これまで社会と個人を論じるときに入ってはこなかった）自然に関する言説が、“惑星社会の諸問題”を顕在化させると同時に隠蔽もしているとする。複雑性を統治しようとしてなされる意志決定そのもののジレンマは、以下のように展開・循環・再帰していく。

私たちは、自らもまた組み込まれている「網の目」の「外部」から、「自然かテクノロジーかを選ぶ」ことは出来ず、私たちは皆、自分の身近な環境に関することには潜在的なニンビー（NIMBY「私の庭ではやめてくれ（not in my backyard）」）である¹²⁾。この背後にあるのは、解決不能な問題であるにもかかわらず、「両極に対立するものからどちらか一方を選択せよ」というありえない要求を私たちに突きつけてくる」ことで、「決定それ自体の足下にあるジレンマを巧妙に回避し、それを否認して隠蔽する」というメカニズムである。そして、「私たちが講じる対処法は、絶えざる意思決定しかない」となり、ジレンマを「名付け直す」努力を妨げるものとなる。

第一のジレンマは、「自律性」と「管理」、個人の選択と、行動の管理・制御との間に生じる。第二に、「システムそのものへの自己介入の力を拡大させようとする（全能（omnipotence）への）衝動」と内外の自然からの制約を引き受ける“責任／応答力（responsibility）”との間のジレンマを生み出す。第三に、科学的知識によってもたらされた不可逆な現実と可逆的な選択とのジレンマをもたらす。第四には、「世界システムの地球規模の拡張」により、文化の異質性や多様性に対する「包摂（inclusion）と排除（exclusion）」のジレンマをもたらす¹³⁾。

メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剝奪された人々の間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、現在を生きる人間の“責任／応答力”による新たな視角、人類という「種の新しい文化」にまで考えを広げ、深めようとする。すなわち、「人類は、地球に住むことへの責任／応答力、そして種を破滅に導くような生産物に対して、絶対に侵犯してはならぬ境界を定めるという責任／応答力を引き受けねばならない。人間の文化は、存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリーを、今一度確保すべきである。どのような人間社会も、そのような領域をそれぞれ独自の仕方でも認めてきた。今や、自らを創造する力と破壊する力をも獲得した社会は、そのようなテリトリーを自ら定義し直さなければならぬ。惑星地球における生は、もはや神の秩序によって保証されてはいない。今やそれは、

私たちすべての脆く心許ない手に委ねられているのだ」とする¹⁴⁾。

「潜在的局面」を把握するための理論(“惑星社会”のジレンマを隠蔽する言説をはぎ取る理論、さらには、「調査研究」(観察/聴く)と「政策的プロジェクト」(介入/コミットメント)、調査者と被調査者の間の距離を保つ/縮めることのジレンマを乗り越えるための調査方法の構築が必要となる。その方法として考えられるのが、複合的な方法(エピステモロジー/メソドロジー/メソツズ)としてのフィールドワークである¹⁵⁾。

“うごきの比較学”は、現に今起こりつつある焦眉の問題、小さな兆しに対して、臨機応変に、“臨場・臨床の場”で、“生身の現実”をよく見て、かすかな声とまなざしに耳をすまし、意味づけ、再解釈し、新たな枠組を練り上げることを基本とする。惑星社会という“状況・条件(situazione e condizione)”のもとで、フィールドワークを行う場合、以下のような点が重要となる：

- (1)「絶えざる意思決定」という反応によってジレンマを「回避・否認・隠蔽」しようとする思考態度(mind-set)に対して、「たとえ劇的な解決の見通しがたたないものであったとしても、この時代の重大なジレンマと対峙するような新しい視角」¹⁶⁾をもたらすような“うごき”への着目が課題となる。
- (2)ここでの“うごき”とは、“惑星社会の諸問題(the multiple problems in the planetary society)”への対処の在り方(ways of reaction)がもたらす「ジレンマ」(それは同時多発的に展開・循環・再帰する)がもつ関係性からぶれてはみ出す応答(response)がなされる瞬間、既存の関係性が切り結び直される瞬間(moments that is nascent the reconstellation of relationship, momenti che stanno nascendo la ricostituzione della relazione)である。その場では、“うごき”に対する抑止の力が同時に存在する。
- (3)調査研究のフィールドとなるのは、“うごき”の萌芽と抑止の力がぶつかりあう場・瞬間である¹⁷⁾。フィールドワークの目的となるのは、惑星社会の特定の場・瞬間に偏在する世界システムの既存の関係性が切り結び直される瞬間に居合わせる(being involved with the field, being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)ことである。
- (4)そこでの“衝突・混交・混成・重合の歩み(percorso composito)”, “移行, 移動, 横断, 航海, 推移, 変転, 変化, 移ろいの道行き・道程の社会文化的プロセス(passaggio dei processi socioculturali, passage of socio-cultural processes)”にできる限り居合わせ、その意味の総体の把握につとめることが“うごきの比較学”の目標となる。

4 惑星社会の（境界領域への）フィールドワーク

メルッチが提起した“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する（responding for/to the multiple problems in the planetary society）”というミッションに対して、「既存の関係性が切り結び直される瞬間に居合わせ」た先にあるものは何か。

それは、「ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」¹⁸⁾を自ら定義し直し名付け直す、すなわち“生存の場としての地域社会の探究／探求（Exploring Communities for Sustainable Ways of Being）”という社会構想として理解され得る¹⁹⁾。この“探究／探求”のためになされるのが、“惑星社会のフィールドワーク（Exploring the Planetary Society, Esplorando la società planetaria）”であり、そのフィールドワークの「導き手（mentor）」となるのがメルレルである。

メルレルは、ブラジル社会の“衝突・混交・混成・重合の歩み”をモデルとして、異質性が混成・重合するコミュニティの共成・共創を、“社会文化的な島々のつらなり”として捉える“地域学／比較学”を提唱している。メルレルの島嶼社会論は、世界システム、社会システムを理解する際に、都市・地域を構成する異なる集団・個人を“島々”として捉え、その内なる差異性と特殊性が“衝突・混交・混成・重合”する“うごき”のプロセスを把握する理論と方法である²⁰⁾。

これまで、メルレルとの協力関係のもとで、以下のような調査を行ってきた。サルデーニャ（イタリア自治州）、沖縄、広島、長崎、コルシカ（フランス）、ケルン（ドイツ）、エステルズンド（スウェーデン）、コペンハーゲン・ロスキレ（デンマーク）、サンパウロ・リオデジャネイロ・エスピリトサント（ブラジル）、立川・砂川、川崎・鶴見、平塚、茅ヶ崎、津久井、神奈川の多文化・多言語混成地区、宮古、石垣、竹富、西表、南北大東島、奄美、対島、周防大島（日本）、マカオ（中国への返還以前）、済州島（韓国）、サイパン・テニアン・ロタ・グアム（アメリカ合衆国自治領）、リスボン（ポルトガル）、アゾレス（ポルトガル自治行政区）、カーボベルデ（カーボベルデ）、ヘルシンキ・ミッケリ（フィンランド）、ストックホルム（スウェーデン）、オーランド（スウェーデン語が公用語となっているフィンランドの自治領）、ヴァッレ・ダオスタ（イタリア・フランス・スイスの間国境地域）、トレンティーノ＝アルト・アディジェとアルプス山間地（イタリア・オーストリア・スイスの間国境地域）、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリアとゴリツィア／ノヴァ・ゴリツァ（イタリア・オーストリア・スロヴェニアの間国境地域）、トリエステからイストリア半島（イタリア・スロヴェニア・クロアチアの間国境地域）、ランペドゥーザ（イタリア最南端の島）など、日本社会とヨーロッパ社会とのかかわりの深い地域社会、国家の「中心」から見るなら「辺境」とされるような地域の“深層／深淵”を「理解」するための“探究／探求”をしてきている。

最初の沖縄・広島・長崎とサルデーニャでの調査は、世界システム論、社会システム論などを基盤として、核軍産複合体、人種・民族的階級構造の再編、近代の生産・生活様式の拡大、中心部の管理社会化などの枠組みから比較可能性を確保したうえでの国際比較研究であった²¹⁾。しかしながら、そこでは、地域社会の「構造」と「動態」を「理解」するため予め準備していた「分析枠組」ではどうしても捉えきれないことがらに直面し、沖縄本島（と「日本本土」）、あるいは、サルデーニャ本島（と「イタリア本土」）という対立軸から、“ぶれてはみ出し”、石垣・宮古、南北大東島、奄美、サルデーニャの内陸部や島嶼部という“端／果て”、“深層／深淵”へと、入り込んで／呼び込まれていった²²⁾。

これまでの調査研究は、（通常理解であれば）グローバル／ローカルという枠組みでの研究（(1)国際的な地域社会研究による比較と(2)コミュニティ・スタディーズ）ということになる。

(1)国際的な地域社会研究による比較研究は、サルデーニャ（イタリア）、沖縄・対島・周防大島、コルシカ（フランス）、リスボン・アゾレス（ポルトガル）、カーボベルデ、ヘルシンキ・ミッケリ・オーランド（フィンランド）、ヴァッレ・ダオスタ、トレンティーノ＝アルト・アディジェとアルプス山間地、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリアとゴリツィア／ノヴァ・ゴリツァ、トリエステからイストリア（いずれもイタリアの間国境地域）などの調査研究である。

(2)コミュニティ・スタディーズは、在住外国人の子どもたちが多数暮らす公営団地をフィールドとした「湘南プロジェクト」と、“移動民の子どもたち (children of immigrants)” のネットワークを対象とした「聴け！プロジェクト」で、10年以上にわたる“参与”によって、異質性が衝突・混交する「網の目」の把握を試みたものである。現在は、立川・砂川地区で同様の“コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))”に取り組んでいる²³⁾。

さらにここでは、「中心－周辺」「ピラミッド」型のモデルによる「構造」と「動態」の把握から“端／果て”に位置づけられる場所という観点から、これまでの調査研究を整理し直してみる。

(1)アゾレス、カーボベルデ、マカオ、エスピリト・サントなどは、「(大航海時代以降の) 移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究」²⁴⁾の一貫となる。

(2)この流れのなかで、「大航海時代」（すなわち、ヨーロッパが非ヨーロッパ世界を「発見」し、「下位」に位置づけていくコロニアリズムの時代）以前のヨーロッパのなかでの、移動と定住の諸過程、“衝突・混交・混成・重合の歩み”についての理解をすすめたのが、ミッケリ、オーランド、イストリア、アルプス山間地域などでの調査研究であった。

(3)他方で、「(大航海時代以降の) 移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究」のアジア・太平洋から南米へと拡がる調査研究となるのが、石垣、宮古、南北大東、サイパン・テニ

アン・ロタなどの島々での調査である。

(4)さらには、地理的・客体的な島嶼社会（その多くが国家から見た場合の「辺境」）の内なる“社会文化的な島々”への着目として、サルデーニャ本島の内陸部の“島々”，ラ・マッダレーナ諸島，飛行場が建設されたフェルティリアなどの調査研究があった。

そのなかで、いくつもの多重／多層／多面の「境界 (finis)」が“衝突・混交・混成・重合”しつつ「ともにある (cum)」場としての“境界領域 (cumfinis)”——(1)“テリトリーの境界領域 (frontier territories, liminal territories)”，(2)“心身／身心現象の境界領域 (liminality, betwixst and between)”，(3)“メタモルフォーゼの境界領域 (nascent moments)”という三つの位相から考え、知見を蓄積してきた。そこでは、サルデーニャや沖縄といった地理的・客体的な問題設定が、実は個々人の身体に刻み込まれた——個々の内なる“深層／深淵”，間主観性、精神の境界の問題性を潜在していることに気付かされた。さらにこの一連の調査研究のなかで明らかになったのは、顕在化するか否かにかかわらず、“毛細管現象”として、“未発”であることを常態として“衝突・混交・混成・重合”し続ける社会的プロセスと深くかかわるところの“メタモルフォーゼの境界領域 (metamorfosi nascente)”の重要性である²⁵⁾。

“惑星社会のフィールドワーク”は、(1)このような地理的・客体的な国境地域、(2)そこでの経験を蓄積してきた人々の“心身／身心現象 (fenomeno dell' oscurità antropologica)”，さらには(3)ひとの移動、あるいは国境（や社会文化的な境界線）の移動が起こる瞬間という“多重／多層／多面”の“境界領域”へのフィールドワークとしてなされてきたものを、改めて、惑星社会全体の問題の広がりや深まりのなかに位置づけ直すものとなる²⁶⁾。

5 “国境地域 (borderland)”の再定義——ランペドゥーザと宮古・石垣へ

惑星社会の（境界領域への）フィールドワークは、“国境地域”の再定義を促す。borderlandには、国境地域、境界地、紛争地、奥地、僻地などの意味が混在している。「境界地、紛争地」は、国家間関係の「中心」から見た場合に覇権が衝突する場所という含意となる。他方で、「奥地、僻地」などは、中心的な都市から見て社会文化的に劣位の土地という含意を持つ。そしてまた「どっちつかずの領域・状態」「境界線」「境界領域」という含意のなかには、「管理」された社会の中心部と比して「明晰・判明さ」を欠く「薄暗さ・曖昧さ (obscurity)」という視線が組み込まれている。

そこには、鹿野政直が島尾敏雄の言葉から「鳥島は入っているか」²⁷⁾と問いかけたように、“端／果て (punta estrema/finis mundi, terra of the end of world)”，中心的な視野からは選択的に見落とされている対象（外生変数）という含意が組み込まれている。他方で、こうした場所あるいは人々は、国際紛争などの緊張・対立が生じた場合には、突如、注目され「南島」として

「発見」される²⁸⁾。この「看過」と「発見」の組み合わせによって、「回避・否認・隠蔽」が補強されている。しかし実は、“国境地域 (borderland, frontier/liminal territories, zona di confine, territorio limitrofo)”は、地球規模の複合的問題を抱える“惑星社会”を生きざるを得ない現代人にとって、サイバー空間やデジタルネットワークの背後に存在している“生身の現実 (crude reality)”にふれる場となっている。

地理的・客体的な“国境地域 (borderland)”は、同時に、“心身／身心現象”そして歴史の波動の双方での“限界状況 (liminality, limit-situation)”が立ち現れる“境界領域 (borderland/limit-situation)”でもある。それゆえ、“生身の都市・地域 (living city, community and region)”を視野の“端／果て”から探っていくことは、とりわけ、“惑星社会”という“状況・条件”のもとでより大きな意味を持つ。しかしこの対比は、中心的都市における「ジレンマ」への無関心 (phubbing)²⁹⁾と“国境地域”における関心という一元的・単線的なかたちとはなっていない。そこでは、いかなる“うごき (nascent moments of relationship)”のなかで、意図的に目を閉ざし生身の現実に対して心に壁をつくる性向である“故意の近視眼 (intentional myopia, miopia intenzionale)”と“臨場・臨床の智 (cumscientia ex klinikós, living knowledge)”が衝突・混交・混成・重合しているのかを理解するための方法が必要となる。その方法として、“うごきの比較学”を構築しようとしているということになる。

2017年3月の石垣調査³⁰⁾、2018年3月のランペドゥーザ調査³¹⁾と宮古・石垣調査³²⁾は、(世界システム、国家間関係、国家・地域の関係の)視野の端から探っていくという調査研究スタイルを意識したうえで、“国境地域／境界領域”に着目した調査となっていた³³⁾。

チュニジアの首都チュニスよりも南に位置するイタリア最南端の島ランペドゥーザは、戦略上の「橋頭堡」として、基地・軍事施設が置かれてきたことを除けば、イタリア人・ヨーロッパ人の視野の外に置かれていた。ところが、1986年4月16日カダフィからのミサイル報復攻撃で、ランペドゥーザが注目され、以後、(皮肉なことに)マス・ツーリズムの開発がすすめられていった。そして、近年は、アフリカからヨーロッパへの移民・難民の「玄関口」として「再発見」されている。

琉球弧のなかでも、固有の歴史を持つ宮古・石垣などの「先島」(宮古列島と八重山列島)は、尖閣諸島をめぐる緊張と基地建設をめぐる問題のなかで「再発見」されている。

“惑星社会のフィールドワーク”として意識するかたちで入った上記の調査においては、ランペドゥーザ、サッサリ、石垣、宮古それぞれの場所で、島嶼・国境地域の比較をめぐる議論を行っている。“複数の目で見て複数の声を聴き、複数のやり方で書いていく”という〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソッズ〉は、とりわけイタリアとの間、サルデーニャ州サッサリの共同研究者(メルレルなど)と市民、ミラノのメルッチ夫妻からの人的ネットワークのなかですすめてきた。「3.11以降」は、よりインテンシブなかたちで、シンポジウム・セミナー・

論文などの発話・対話のかたちをとり、毎年、おたがいの社会の動向を、視野の“端／果て”から探っていくことを試みてきた³⁴⁾。今回の調査、ランペドゥーザ、石垣や宮古においても、キーパーソンとの間で、同様の対話を試みている。そのなかで、まさに“惑星社会”という“状況・条件”下であるからこそ、“端／果て”からつながるといふ事態に遭遇することが出来た³⁵⁾。それゆえ、“境界領域 (borderland/limit-situation, zona di confine e territorio limitrofo/ situazioni-limite)”を名付け直すという営みは、アジア・太平洋とイタリア・地中海の“社会文化的な島々 (isole socio-culturali)”のつらなりによってすすめているということになる。

6 今後に向けて——“社会文化的な島々”から見た“基地の比較学”

この一連の調査の旅程を、“惑星社会のフィールドワーク”の観点から見直すなかで、〈“社会文化的な島々”から見た“基地”の“比較学”〉というテーマが浮かび上がってきた。

調査研究のフィールドとして考えられるのは、“基地”建設が地域問題の焦点となるような地域である。ここでの“基地 (base, camp, installation)”とは、国家や地方自治体が計画・政策的に設置する巨大な施設 (拠点) のメタファー (仮設概念) である。それゆえ、軍事施設のみならず、核施設、空港、清掃工場・最終処分場、下水処理場、火葬場、食肉処理施設、石油備蓄基地など、「迷惑施設 (NIMBY)」と称される施設が含まれる。本調査研究は、①特定の地域社会・場所が“基地”の候補地として選択される場合、そこにはいかなるメカニズム・構造的要因が働いているのか、その条件となっている要素・相関関係を事例研究により析出する。②「迷惑施設 (NIMBY)」と称される施設が建設される地域・場所が、特定の社会内で、いかなる固有性 (差異性と特殊性) を有しているのかを、地域の歴史的社会的側面から把握する。③そのうえで、事例研究に即して、長期的に持続してきた地域生活のなかに「侵入」してきた“基地”による「断裂」とそこでの持続・抵抗、すなわち地域開発／地域の「自立」の社会文化的プロセス (波動) を“社会文化的な島々”の理論から捉え直すことで、地域社会研究に新たな視点を提供することを目標とするものである³⁶⁾。そのために、以下のような調査計画をすすめていく：

(1)石垣・宮古・与那国 (沖縄)、川棚 (長崎)、立川・砂川 (東京)、丹後半島 (京都)、保戸島 (大分) で地域調査を実施し、データ収集・整理・分析を行う。

(2)自衛隊の基地問題を抱える石垣・宮古・与那国、ダム建設問題と特攻隊基地跡を抱える川棚では、2017年3月調査に着手している。立川広域防災基地・陸上自衛隊駐屯地を抱える立川・砂川地区では、2012年以降、“コミュニティを基盤とする参与的行為調査”を遂行し、地域の諸団体との協力関係を形成している。米軍レーダー基地を抱える丹後半島では2017年8月に予備調査を行い、かつて海軍のレーダー基地があったために空襲された保戸島での調

査を準備している。

(3)立川・砂川地区の参与的行為調査からの知見を確認する。これに加えて、石垣・宮古・与那国、川棚、丹後半島、保戸島での地域調査を実施し、さらなる調査研究への参照点となるべき理論・方法の錬磨を達成する。

(4)日本・アジアをフィールドとした調査と並行して、ランペドゥーザからパンテッレリーア（シチリアとチュニジアの間の島）、ラ・マッダレーナとアジナーラ（サルデーニャとコルシカの間の島）、さらには、セウタとメリリヤ（モロッコ地中海沿岸に位置するスペインの飛地領）での調査を行う。

“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する”「新たな問い」を立てるため、個々の調査が、“惑星社会のフィールドワーク”であることを意識しつつ、“うごきの比較学”を練成していくことが、同時代の要請であると考えている。

付記：本稿は、社会科学研究所の研究チーム「惑星社会と臨場・臨床の智」および第27回「中央大学学術シンポジウム」の「臨場・臨床の智」チームの調査研究活動に加えて、前川財団家庭教育研究助成金「大学と地域の協業による立川・砂川地区『子どもプロジェクト』の試みに関するイタリアとの共同研究」（2017年10月27日～2018年7月31日）、科学研究費・基盤研究B海外学術調査「“惑星社会”の問題に応答する“未発の社会運動”に関するイタリアとの比較調査研究」（2017年度）によって実施した調査研究活動の成果が含まれている。

注

- 1) 鶴見和子『南方熊楠—地球志向の比較学』講談社、1981年、178ページおよび182ページ。
- 2) 諸個人の深部で不断に醸成されている「潜在的局面」の“うごき”については、“毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動”というかたちで、新原道信「“惑星社会の諸問題”に応答するための“探究／探求型社会調査”—『3.11以降』の持続可能な社会の構築に向けて」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学23号、通巻248号、2013年、64-66ページ、さらに、新原道信「“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部、2014年、47-50ページで理解をとりまとめている。
- 3) 稲上毅「現代社会論」佐藤守弘他編・北川隆吉監修『現代社会学辞典』有信堂、1984年、47ページ。
- 4) Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996年＝新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社、2008年、177-182ページ（第9章「地球に住む」の一節として設けられた「限界と可能性」）、および新原道信「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求(1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号、通巻253号、2014年、51-55ページを参照されたい。
- 5) メルッチ夫妻との継続的な対話による理解に基づいている。最新のものは、メルッチ夫人アンナ・ファブリーニ氏との間で、2018年3月にミラノで行った。地球規模の問題、とりわけ、社会のシス

- テムのなかで生じる身体レベルの痛みという反応に対して「問題解決」の方向性とは異なる対面の仕方（有機的なつながりをもった身体と身体のなかの社会の総体的な把握の方法）について議論を行った。ファブリーニ氏が教えるミラノ・カトリック大学の学生は、人間の心理や神経科学について、知覚や認知のメカニズムについて個別的な論点を学ぶことはしているが、いかに人間に対する人間的な対応を「個別科学」の枠を揺りうごかしつつ変革していったF. バザリアやユングたちの存在を知らない。J. ガルトゥングが指摘していた歴史性と社会性を欠いた枠組み内の思考をすることでシステム化された社会のなかでの「居場所」を確保するという「流れ」をここにも見てとれる。Johan Galtung, “Sinking with Style”, Satish Kumar (edited with an Introduction), *The Schumacher lectures. Vol.2*, London: Blond & Briggs, 1984年＝耕人舎グループ訳『シュマッハーの学校—永続する文明の条件』ダイヤモンド社, 1985年, 14-15ページ。
- 6) Alberto Melucci, “Sociology of Listening, Listening to Sociology”＝新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域—自己決定・協働, その主体 地域社会学会年報13』ハーベスト社, 2001年, 7-9ページ。
 - 7) 鳥海光弘・阿部勝任・住明正・鹿園直建・井田喜明・松井孝典・平朝彦・青木孝『岩波講座 地球惑星科学14 社会地球科学』岩波書店, 1998年などは、地球科学の側から社会を捉えようとしている。
 - 8) 新原道信「“惑星社会の諸問題”に回答するための“探究／探求型社会調査”—『3.11以降』の持続可能な社会の構築に向けて」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学23号, 通巻248号, 2013年を参照されたい。
 - 9) メルッチは、死去する1年前の2000年故郷リミニでのシンポジウム「リミニ人の省察」で下記のように述べている：「……過去においては、変化や革新, あるいは支配的傾向への異議申し立ても、数量に換算されていました。しかしいまや多数であることが必ずしも必要ではない世界へと突入しているのです。いまや私たちが暮らす相互依存的で相互作用的な世界においては、限定されたものやマージナルなものもまた／かえって効果的であったりもするからです。この認識が私に楽観主義の態度をとらせる根拠となっています。……私が楽観的なのは、深く社会学的な理由からなのです。」(Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996年＝新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, viiページ。)
 - 10) 新原道信「“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるために—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求(2)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学25号, 通巻258号, 2015年を参照されたい。
 - 11) “臨場・臨床の智”については、新原道信「“うごきの比較学”にむけて—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求(1)」『中央大学社会科学研究所年報』21号, 2017年を参照されたい。
 - 12) Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996年＝新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 173ページ。
 - 13) 同書, 174-175ページ。
 - 14) 同書, 176-177ページ。
 - 15) ここでの“フィールドワーク (learning/unlearning in the field)”とは、以下のようなものであり、「隠蔽」の力から我が身を引き剥がすための“思行（思い, 志し, 言葉にして, 考えると同時に身体を動かしてみるという投企）”となっている：

フィールドワークとは、ある特定の地域をフィールドとして学問的な方法で実地調査をするだけではない。むしろ、フィールドに出て調査に意識を集中させている時間以外のほとんどすべてをフィールドとして、自覚的に行うべきデイリーワークが含まれている。たしかに、フィールドワー

- クは、「知識や見聞」を広げるための「旅行」や、自分にとっては「未知の土地」へと入り込んでいく「冒険」とは異なる。とはいえ、生身の身体で「慣れない土地」へとむかうときには、気候の変化や病気や怪我、盗難や事故等から身を守る力が必要となる。また「慣れない土地」で、「慣れない言葉」を使って、自分が何者で、なぜここに来たのかを伝える力、「相手のこと」を理解する力が必要となる。その意味では、「探検」や「踏査（とうさ）」「渉猟（しょうりょう）」といった言葉で表されるような要素を持ってもある。さらに、このような意味での「旅／フィールドワーク」をつづけていくと、自分や自分と近いひとたちの「生老病死」の問題は避けて通れなくなる。……個々人の心身／身心にまで降りていく“旅／フィールドワーク”は、あきらかなる介入（*intervento*）の暴力を自覚し罪責感とともにその自らの業を引き受ける、遮蔽しようと思えば出来ないことはないと思われることがら、“識る”ことの恐れを抱くことがらをあえて境界をこえて選び取るしかない。（新原道信「“深層／深淵”のヨーロッパーオーランド、カーボベルデ、サルデーニャとコルシカにおける“境界領域のフィールドワーク”」新原道信編『境界領域への旅—岬からの社会学的探求』中央大学出版部、2014年、402-403ページ。）
- 16) 前掲書『プレイング・セルフ』、173ページ。
- 17) 「“うごき”の萌芽と抑止の力」については、「3.11」直後の「いままでと同じではいられない」という知覚と、「おわたこと」にしようとする“忘却（*amnesia*）”“忘我・自失（*raptus*）”の力、受難・死・喪失・社会的痛苦を「なかったこと」にする“没思考の浄化主義（*purificanismo spensierato*）”の力について、新原道信「“境界領域”のフィールドワーク”から“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部、2014年、2-6ページで論じている。
- 18) 前掲書『プレイング・セルフ』、176-177ページ。
- 19) 「ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」（未発のコミュニティ）については、新原道信「惑星社会のフィールドワークにむけてのリフレクシヴな調査研究」新原道信編『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部、2016年、68-74ページで論じている。
- 20) 新原道信「A. メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み—“境界領域の智”への社会学的探求(1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学27号（通巻268号）2017年を参照されたい。
- 21) 新原道信「“うごきの比較学”にむけて—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求(1)」『中央大学社会科学研究所年報』21号、2017年、82-83ページで一部紹介している。
- 22) 新原道信「ヘテロトピアの沖縄」西成彦・原毅彦編『複数の沖縄 ディアスポラから希望へ』人文書院、2003年、あるいは、新原道信『境界領域への旅—岬からの社会学的探求』大月書店、2007年などを参照されたい。
- 23) 立川では、「3.11以降」に震災被災者を受け入れた公営団地との協力関係により、〈立川プロジェクト〉を立ち上げた後、砂川地区の諸組織・団体（地元小中学校、児童館、連合子供会（砂子連）、市民グループなど）との関係も構築され、〈大学と地域の協業〉は、「支援」から共成・共創関係への萌芽が見られる。
- 24) 新原道信「境界領域のヨーロッパを考える—移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究を通じて」『横浜市大論叢』人文科学系列、第60巻、第3号、2009年を参照されたい。
- 25) “境界領域”については、新原道信「“境界領域”のフィールドワーク”から“惑星社会の諸問題”を考える」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部、2014年、38-41ページで理解をとりまとめている。
- 26) メルッチは、調査のリフレクションについて以下のように述べている：
- リフレクシヴな調査研究の在り方、自らが観察するものへの視線の在り方を自らにも向けると

いう在り方は、これまでの異なる位相で行われた調査の歴史すべてにも向けられ、これまでこれからの調査活動のプロセスすべてに対して、徹底的なリフレクションを求めることになる。こうして、調査研究の成果のとりまとめにあたっては、創造活動そのものと同時に、その活動を理解しようとした認知のプロセスそのものにも焦点をあてることとなった。（Alberto Melucci, 2000, “Verso una ricerca riflessiva”, registrato nel 15 maggio 2000 a Yokohama = 新原道信訳「リフレクシヴな調査研究にむけて」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部, 2014年, 103ページ.)

27) 以下の言葉から来ている：

各種の日本地図を見ますと、種子、屋久までは書き入れてありますが、その南の方はたいいてい省略されています。それは地図の紙面がないということだけではないようです。われわれの意識の底にそこははずしてもいいというような感覚がのこっているのです。たとえば奄美の地図を書く時に、徳之島の西の方の鳥島を落としていても平気だという気持ちをなくしたいのです。（鳥尾敏雄「私の見た奄美」『鳥尾敏雄全集 第16巻』晶文社, 1982年, 228-29ページ; 鹿野政直『「鳥島」は入っているか—歴史意識の現在と歴史学』岩波書店, 1988年, 10-11ページ.)

28) 「観察者の世界観に応じた様々な意味付与」については、「実際の沖縄とは別に『原日本』として見いだされる『南島』は、自己同一的な『日本』を作り出すための差異として措定され、馴致され、鋳型に流し込まれて見いだされている」、つまり、「『南島』は、同質的な『日本』を固定するための微妙な差異として、またもっともリスクの少ない、安全な『比較』対象として固定され」たとする村井紀『南島イデオロギーの発生—柳田国男と植民地主義』福武書店, 14-15ページに依拠しつつ、新原道信「ヘテロトピアの沖縄」西成彦・原毅彦編『複数の沖縄 ディアスポラから希望へ』人文書院, 2003年, 408-430ページで論じている。

29) ファブリング (phubbing, 眼前の生身の人間への冷遇と無関心) とは、スマートフォンをはじめとするモバイル端末に熱中するあまり、現実社会で居合わせている人へ意識を向けず、コミュニケーションが阻害されてしまっている状況を指す語である。phubbingの語はphone と snubbing (冷遇) を合わせた英語の造語である。

30) 2017年3月の石垣調査では、①自衛隊基地候補地（於茂登・開南・嵩田・川原）のフィールドワーク、②基地反対の市民運動団体のメンバーとの懇談、③基地候補地の地域住民との懇談、④石垣・八重山に関する資料収集などを行った。

31) ランペドゥーザ島において、メルレルの助力により、現地のフィールドワーク（新港と旧港、リゾート開発地区、アラビア語で船名が記されている難破船、環境保護教育センター、教会、市役所と大通り (Via Roma)、難民収容所、空軍基地、旧NATO (米軍) 基地、北西部の岬から北岸を進み、北東岸の灯台と軍事施設、難民たちも埋葬されている共同墓地、ディーゼル発電所、海水淡水化施設など)、とキーパーソン (元市長、医師、心理療法士など) への非構造的インタビューを行った。観光に特化した産業構造の歴史的経緯とその歪み、移民・難民という“他者”に対する否定的反応というグローバルな現象と国内・国外における格差の拡大の接点、島嶼の軍事化とフロンティア化、島嶼地域のマスツーリズムと持続可能な社会に向けた課題が明らかになった。

32) 宮古島においては、基地関連施設のフィールドワーク (伊良部大橋; 伊良部島、長山港 (海上保安庁の巡視艇・拠点); 渡口の浜 (米海兵隊Facebook掲載の写真で「標的」とされた場所); 下地島空港; 白鳥崎公園; ふなうさぎバナタ; 佐良浜港, 旧千代田カントリークラブ・陸上自衛隊基地予定地ゲート前; 敷地内の御嶽 (うたき) の森; 千代田・野原地区; アリランの碑 (「宮古島に日本軍「慰安婦」の記念碑を建てる会」, 高澤義人の詩碑; 航空自衛隊機宮古島分屯基地; 準天頂衛星システム宮古島追跡管制局; 保良 (ほら) 地区の旧保良鉱山・弾薬庫予定地, 自衛隊射撃訓練場; 沖縄県不発弾保管庫・弾薬庫, 旧宮古島DGPS局・海上保安庁射撃訓練場; 東平安 (ひがしへんな) 崎;

高野漁港・水陸両用車上陸予定地：「不法投棄・散乱ごみ監視事業」住民訴訟判決説明会；久松地区の市指定建造物「久松みゃーか」（巨石墓群），久松五勇士顕彰碑，久松の機関銃壕，松原公園清掃業務など），および，軍事基地配備と地域社会の実態調査と資料収集，反対運動参加者との意見交換を行った。石垣島においては，2017年に会っていただいた方たちと再会の後，字（あざ）・公民館・コミュニティに関する資料収集，石垣市役所市史編纂課にて関連資料の問い合わせと収集を行った。

33) 現在進行中の本調査研究については，2018年度研究叢書のかたちでとりまとめる予定である。

34) 日本とイタリア，それぞれの“国境地域（borderland, frontier/liminal territories, zona di confine, territorio limitrofo）”における比較と対話は，近年では，2016年2月にサルデーニャ・ミラノ調査，3月沖縄調査，8月サルデーニャ調査を行い，2017年には，2月サルデーニャ調査，3月に石垣と長崎県の川棚調査などを行い，2018年3月のランペドゥーザ調査後のサッサリ，ミラノ，そして宮古と石垣での調査と続いている。この場では，下記の報告と討論により，長年かかわりのある研究者・市民との間での“対話的にふりかえり交わる（riflessione e riflessività）”調査をしている：

- Michinobu Niihara e Tetsutada Suzuki, “Terza Missione dell’Università e responsabilità della ricerca : Esperienze di formazione e ricerca con le comunità”, in Laboratorio FOIST per le Politiche Sociali e i Processi Formativi with EnRRICH - Enhancing Responsible Research and Innovation through Curricula in Higher Education, Dipartimento di Scienze Umanistiche e Sociali - Università degli Studi di Sassari, Sassari, il 24 febbraio 2016.

- Michinobu Niihara, “Coesione sociale e promozione della cittadinanza attiva. Ricerche a confronto nel contesto giapponese e in quello sardo ed europeo”, in Associazione IntHum - Laboratorio interculturale di ricerca e di promozione della condizione (H) umana, Sassari, il 8 agosto 2016.

- Michinobu Niihara e Tetsutada Suzuki, “Ricerca sociale e impegno comunitario”, in FOIST per le Politiche Sociali e i Processi Formativi Laboratorio, Dipartimento di Scienze Umanistiche e Sociali - Università degli Studi di Sassari, Sassari, il 24 febbraio 2017.

- Michinobu Niihara e Tetsutada Suzuki, “Disuguaglianze, senso civico, partecipazione. Come lavorare insieme. Le nostre esperienze e quelle giapponesi a confronto”, in Associazione IntHum - Laboratorio interculturale di ricerca e di promozione della condizione (H) umana e Comunità Attive e Promozione della Coesione Sociale, Sassari, il 24 febbraio 2017.

- Michinobu Niihara e Tetsutada Suzuki, “Settimo incontro di comunità fra cittadini del quartiere di Santa Maria di Pisa, ricercatori e operatori sociali”, a seguito delle riunioni e delle “Caminate comunitarie” realizzate nel quartiere, in Ricerca su: “Capacitàzione: comunità attive e promozione della coesione sociale” presso Uffici Comunali del Settore Coesione Sociale e Pari Opportunità, Sassari, il 27 febbraio 2017.

2018年3月のランペドゥーザ調査では，ランペドゥーザからサッサリに移動してすぐに，メルレルが主導する地域研究所（INTHUM）が企画したセミナー「島嶼，コミュニティ，人間の移動」に報告者として参加し，イタリアと日本の宮古島・石垣島の島嶼・国境地域の比較をめぐる議論を行った。

- Michinobu Niihara e Tetsutada Suzuki, “Comparazioni e narrazioni tra isole giapponesi, pelagie e sarde, di ritorno da Lampedusa, Incontrano le equipe dell’associazione IntHum, del Laboratorio FOIST”, in Associazione IntHum - Laboratorio interculturale di ricerca e di promozione della condizione (H) umana e Comunità Attive e Promozione della Coesione Sociale, Sassari, il 10 marzo 2018.

サッサリのセミナーでは，(a) 小さな島嶼の軍事化とフロンティア化，(b) 国家中心型とは異なった辺境・境界地域の視点の意義などの論点を明確化し，今後の共同比較研究の方向性について確認

した。ミラノにおいて、アンナ・ファブリーニ氏との談話を行い、現代社会と身体の間をめぐり意見交換と今後の研究打合せを行った。

- 35) 石垣と宮古、それぞれの場所でキーパーソンの方たちには、『“境界領域”のフィールドワーカー 惑星社会の諸問題に回答するために』と『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』をお渡ししている。その後になし得た懇談の場では、イタリア・地中海・サルデーニャからの知見をお伝えし、懇談の記録は、出席者の方たちにテープ起こしたものを返している。その後のメール等でのやりとりのなかでも、個々の論題とかわると思われる論稿（沖縄に関するものだけでなく、サルデーニャ・地中海の島々が直面している状況に関するもの）をお送りするなどした。そのなかで、自らが置かれている“状況・条件”を“大きくつかみ (comprendend)”, “臨場・臨床の智 (cumscientia ex klinikós, living knowledge)”を有している“地識人 (the wise on the street, i saggi della strada)”たちとの間で、これまで本調査研究グループが蓄積してきた言葉（理論、もの見方）への「共感」が生まれた。たとえば以下のようなものである：

鳥尾敏雄さんの引用は「その通り！」と思います。些細なことですが、テレビの天気予報、今でこそNHKは八重山地方の予報を流しますが、かつてはありませんでした。民放ではいまだに無い局もあります。（2018年3月宮古・石垣調査後のやりとり）

- 36) 理論的には、“廃棄 (dump [ing])” “線引き (invention of boundary)”なども重要な論点となる。これまでも、メルレル（ブラジルとアルプスと地中海とひとの移動）と新原（朝鮮半島、沖縄、サルデーニャ）は、それぞれの理論と方法の“背景 (roots and routes)”の偏差を自覚しつつ、「生成の理論」についての思考実験をすすめてきた。“廃棄 (dump [ing])” “線引き (invention of boundary)”については、新原道信「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求(1)『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号、通巻253号、2014年、46-51ページを参照されたい。